

乳牛の分娩前診断にもとづく 乳房炎の効果的な治療法

乳房炎とは乳腺組織の炎症のことで、そのほとんどは細菌感染が原因になっています。乳牛の乳房炎は分娩後における発症事例が多く、乳量の損失や乳質の低下に加えて、治療費の増加、あるいは牛の淘汰などによる経済的損失が生じます。また、生乳の廃棄や治療などの煩雑な管理作業が強いられます。そこで、分娩前7～10日前の乳汁の目視検査で乳房炎と診断された乳牛に対する抗生物質セファゾリンによる効果的な治療法を明らかにしました。

☆ 技術の概要

1. 分娩の7～10日前に乳汁を検査し、乳房炎と診断された場合には、乳房内に抗生物質（セファゾリン（CEZ）450mg 入り）を1回注入します（図1）。
2. 主要な乳房炎原因菌であるブドウ球菌やレンサ球菌による乳房炎の治癒率は80%以上もあります。また、治りにくいと言われる腸球菌や大腸菌などによる乳房炎の治癒率は50%以上もありました。
3. 炎症反応の指標となる乳汁中の体細胞数は、15万個/ml以下まで低下するので、大きな治療効果が得られます（図2）。

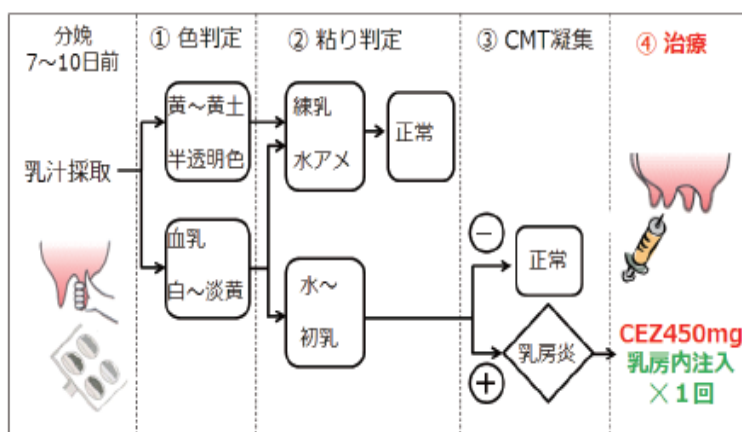


図1 分娩前に乳房炎を診断し治療するまでの流れ
(CMT凝集はPLテスターを使用します。)

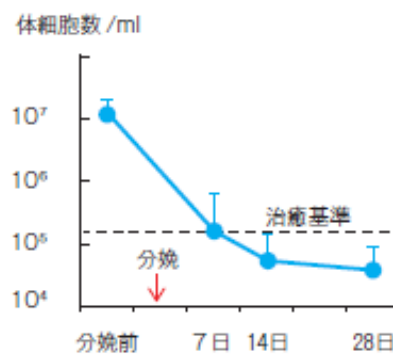


図2 治療後の体細胞数の変化

☆ 活用面での留意点

分娩予定7～10日前に乳頭口を消毒してから採取し、採取後はディッピング液で消毒します。治療後は分娩まで放置し、初乳は7日間廃棄します。詳細は、福岡県農業総合試験場家畜部乳牛チーム北崎宏平(TEL: 092-925-5232)にお問い合わせ下さい。

(日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男)